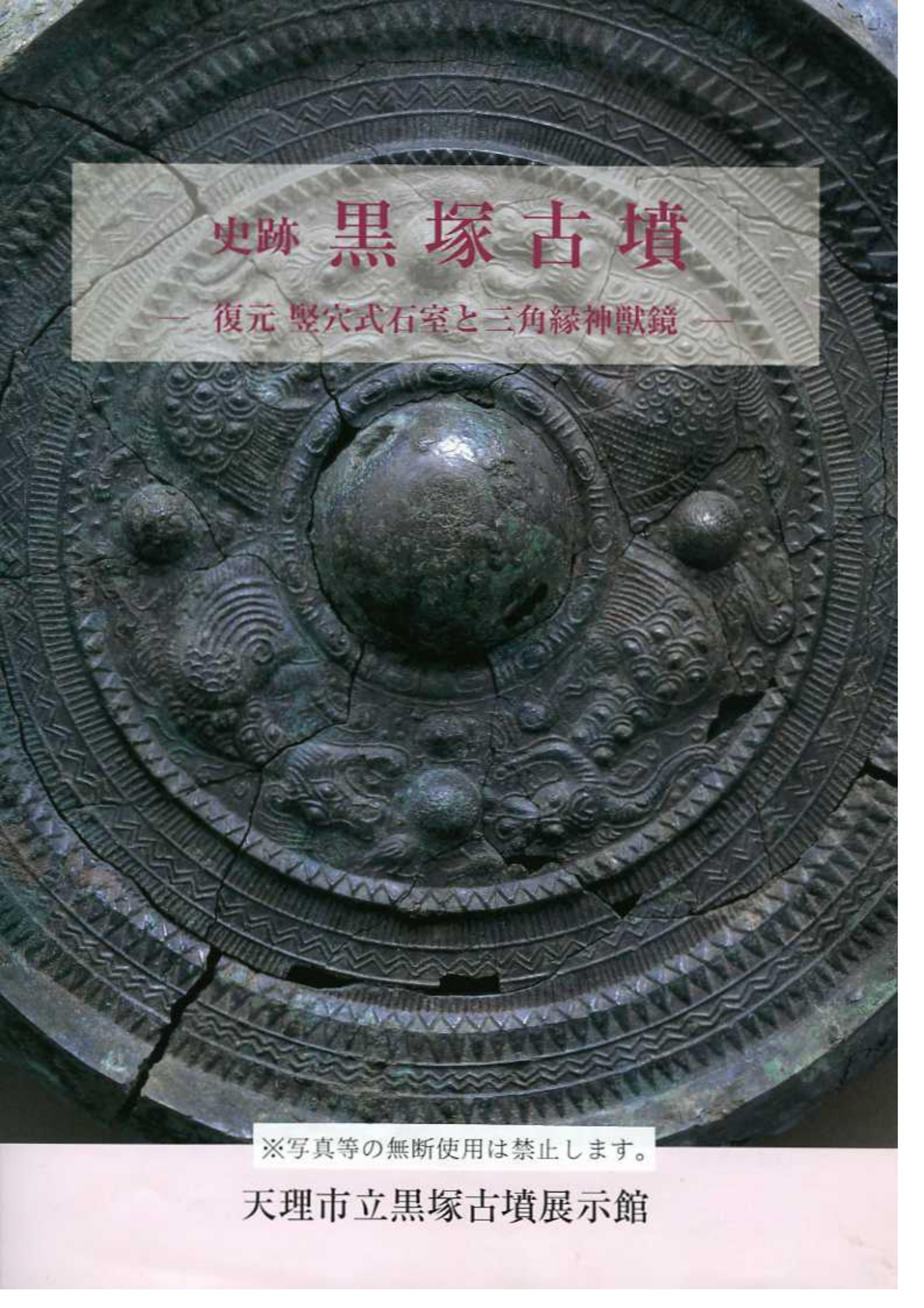




史跡 黒塚古墳

— 復元 竪穴式石室と三角縁神獸鏡 —

※写真等の無断使用は禁止します。

天理市立黒塚古墳展示館

ごあいさつ

史跡黒塚古墳のガイダンス施設として、皆様に利用していただける展示施設が開館いたしました。黒塚古墳は、平成9・10年にかけて発掘調査が実施され多大な成果をあげられました。特に三角縁神獣鏡が33面も出土したことは、学術研究にとって貴重な資料を提供しました。そして、平成10年1月17日に行われた現地説明会には、2万人にもおよぶ一般見学者の来場があったことは記憶に新しいところであります。

黒塚古墳は調査終了後に埋め戻されましたが、当館は発掘調査時の石室と副葬品の配列を正確に再現し、改めて黒塚古墳の理解を深めていただけるように展示いたしました。古墳文化の一端に触れていただければ幸いです。

平成14年10月12日
天理市教育委員会



▲竖穴式石室全景



▲黒塚古墳展示館

凡 例

1. 本書は、天理市立黒塚古墳展示館の案内冊子として編集した。
2. 編集に際しては、奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所・天理市教育委員会編『黒塚古墳調査概報』1999を参照した。
3. 本書の写真の多くは奈良県立橿原考古学研究所の保管である。関係者の方々に厚く御礼申し上げます。
4. 本書で使用している写真は、梅原章一、阿南辰秀、佐藤右文氏らの撮影である。

※写真等の無断使用は禁止します。

大和古墳群と黒塚古墳

大和古墳群は、奈良盆地の東側で春日断層崖の傾斜地に沿って築かれた古墳群である。古墳時代前期(3世紀後半から4世紀代)に、南北約4.5km、東西1.5kmの範囲で、前方後円墳30基以上、前方後方墳4基、円墳などで構成されている。写真はこのうち柳本古墳群をカバーしている。手前の古墳は渋谷向山古墳(景行天皇山辺道上陵として管理されている)で、全長300mの規模を誇る。後方は行燈山古墳(崇神天皇山辺勾岡上陵として管理されている)で、全長は242mの規模を有する。

史跡黒塚古墳は、この行燈山古墳の左後方に位置し、右側には史跡櫛山古墳が位置している。地形的には櫛山古墳から盆地に向かって延びる丘陵上にこれらの古墳は築かれ、黒塚古墳はこの西端の微高地が築造地として選ばれたようである。

大和古墳群が作られた地域は、我が国の古墳時代の始まりとしての前方後円墳を誕生させ、倭国の統合の象徴とされたのであろう。



▲黒塚古墳と巨大古墳(柳本古墳群)



▲黒塚古墳(1997年調査当時)

※写真等の無断使用は禁止します。

竪穴式石室

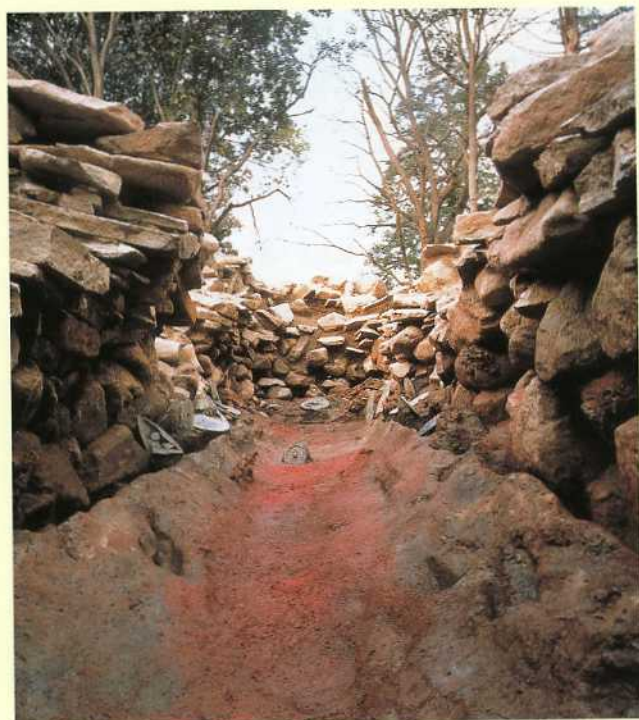
石室は盗掘や地震による大規模な破壊があったが、後円部中央に南北方向に作られていた。長さ約8.3m、幅約0.9～1.3m、高さは約1.7mという長大な石室である。

石室の構造は、下部には川原石を積み、上部は板石で合掌形に積まれ、いかにも不安定な壁構造である。石室の周辺に散乱する石は、石室を支える裏込め石である。

石室の中央には、棺を置いた粘土棺床がある。木棺はクワの巨木(直径約1m、長さ約6m)が用いられたが、すべて腐って残存していない。粘土棺床の中央と周辺には、鏡や鉄製品が副葬された当時のままで検出された。



▲竪穴式石室全景（北から）



▲石室内の粘土棺床と鏡の配列（南から）

鏡の配列

石室の中から北側を見ている。中央の特に赤い部分は、粘土棺床に付着した水銀朱の色である。この部分に遺骸が安置されていたと推定される。頭部付近には、写真中央にある画文帯神獸鏡が置かれていた。文様面を南に向けている。画文帯神獸鏡の左右には刀・剣が置かれていた。これらが棺内に納められた副葬品である。

粘土棺床と壁の間には、三角縁神獸鏡が配列されていた。鏡面を内側にして立てていたのである。正面には三角縁盤龍鏡が見える。

※写真等の無断使用は禁止します。



▲鉄刀・鉄剣

上が刀、下が剣である。この2振りとは棺内の人体側辺にあたる位置におかれていた。日常的に身近にあったものと思われる。



▲Y字形鉄製品

全長約41.3cmの大きさがある。鉄板を加工して先端がY字状に開いている。上端と中央の左右には円盤状の丸い突起を作り、基部は棒状のものに差し込んだのであろう。円形の突起物には孔があけら

鉄鏃は170点以上出土している。矢柄の口巻部が残っているところから、当初は矢柄も装着されていたものと思われる。



▲鉄鏃



▲小札類

革綴冑の小判形をした鉄製の部品である。頭部が丸く作られ、周辺には紐を通す穴がけられている。これを互いに重ね合わせて、ヘルメット状の冑が作られた。600点以上の部品が出土しているものの、復元するまでにはいたっていない。冑は本来は武具としての役割であるが、鏡と同様に権威の象徴でもあった。

れ、ここには絹織物が付着していた。リボンのような飾りが付けられた。ほぼ同形同大に復元される1点が別に出土している。祭祀の場で使われた儀仗のようなものが推定される。

※写真等の無断使用は禁止します。



※写真等の無断使用は禁止します。



▲画文帯神獣鏡

径13.5cm



▲3号鏡 三角縁銘帯四神四獣鏡

径23.2cm



▲5号鏡 三角縁獣帯五神四獣鏡

径22.5cm



▲6号鏡 三角縁銘帯四神四獣鏡

径22.0cm

三角縁神獣鏡

鏡の縁が三角形を呈するため一群として分類された。文様面には古代中国の神仙世界を表現した神像、霊獣が浮き彫りされている。三角縁神獣鏡は、我が国ではこれまで400面以上出土している。いわば古墳時代を通じて最も流行した鏡であり、これが副葬された古墳は、その地域を代表するような大形の前方後円墳が多い。



▲三角縁神獣鏡

※写真等の無断使用は禁止します。



▲7号鏡 三角縁獣帯四神四獣鏡

径22.3cm



▲8号鏡 三角縁神人龍虎画像鏡

径22.3cm



▲10号鏡 三角縁銘帯三神四獣鏡

径21.8cm



▲15号鏡 三角縁獣帯四神四獣鏡

径22.2cm

黒塚古墳出土鏡

黒塚古墳から出土した鏡は34面である。画文帯神獣鏡1面と三角縁神獣鏡33面である。画文帯神獣鏡は棺内の頭部付近に置かれていた。生前に使用した鏡であろうか。三角縁神獣鏡は棺外に配置され、すべて鏡面を内側に向けていた。鏡そのものは当初は絹織物で包まれていたようである。

三角縁神獣鏡は、同じ文様の鏡が全国で出土していることが確認された。これは倭王権を象徴する威信財として、全国の豪族を服従させていく過程で配布されたことを表しているようである。

※写真等の無断使用は禁止します。



▲17号鏡 三角縁複波文帯盤龍鏡 径24.7cm



▲19号鏡 三角縁銘帯四神四獸鏡 径22.3cm



▲21号鏡 三角縁銘帯四神四獸鏡 径23.7cm



▲22号鏡 三角縁銘帯四神四獸鏡 径22.5cm

「銅出徐州」「師出洛陽」

3号鏡と22号鏡、32号鏡には中国の銅産出地や鏡工人の出身地にかかわると推定される文章が確認される。徐州は現在の山東省から江蘇省あたりとされる。師とは鏡工人であり、洛陽は魏国の都であった。このため、三角縁神獸鏡の製作地を魏国と考える有力な根拠とされた。

鏡に記された文章は、都出身の優秀な工人により作られた立派な鏡であることを明記したのである。



▲3号鏡



▲22号鏡



▲32号鏡

※写真等の無断使用は禁止します。



▲24号鏡 三角縁唐草文帯四神四獣鏡 径23.7cm



▲28号鏡 三角縁獣帯四神四獣鏡 径22.5cm



▲29号鏡 三角縁獣帯四神四獣鏡 径22.0cm



▲32号鏡 三角縁銘帯四神四獣鏡 径22.3cm

神仙と霊獣

三角縁神獣鏡の主要なモチーフは、神仙と霊獣の織りなす世界観—神仙思想—を直径20cmあまりの空間に表現された。神像は代表的なものとして「東王父」と「西王母」がある。これらは

崑崙山に住む不老不死をつかさどる神々である。獣は虎や龍で口には巨という器具をくわえている。

霊獣の中央にある文様は、傘松形文様と呼ばれる。神仙の持ち物を表現しているようである。



※写真等の無断使用は禁止します。